



敬愛

校長 吉田 修

〒183-0027 府中市本町 4-16

☎ 042-361-9303

ホームページ <http://www.fuchu03c.fuchu-tokyo.ed.jp/>

校長 吉田 修

先日、7月7日に行われる「七夕」がありました。遅くなってしまいましたが七夕にまつわる話をしたいと思います。願いを込めた短冊を笹に飾り、織姫と彦星が再会する星空に思いを馳せると言われています。

七夕は江戸時代に季節の節目を意味する「五節句」の一つに定められ、古くから伝わる日本の夏の風物詩でした。しかし、七夕の伝説や歴史は織姫と彦星の物語。二人が一年に一度会うことができるのが、7月7日の七夕というのは広く知られています。七夕の起源には諸説ありますが、すでに紀元前600年ごろの中国最古の詩集「詩経」で、「牛郎織女（ぎゅうろうしゅくじょ）」のお話が語り伝えられていました。天から万物を支配する神「天帝」の衣を縫っていた「織女（しよくじょ）」。天帝はいつも一人でいる織女に、働き者で牛飼いの「牽牛（けんぎゅう）」を婿として迎え入れました。しかし夫婦になってから仕事をおろそかにした織女に天帝は激怒し、二人を天の川を隔てて引き離したのです。悲しみに暮れている二人を見かねた天帝は、年に一度、7月7日の夜だけは会うことを許しました。それ以来、この日が訪れるとカササギが羽を広げて天の川に橋を架けたと伝えられています。

中国では、「織姫のように手先が器用になりたい」という女性の願いと重なり、「乞巧奠（きっこうでん）」という裁縫や手芸、書道などの上達を祈る祭りが生まれました。これらが奈良時代に日本に伝わり、現在の七夕の原型になったといわれています。

また二人の物語は、天の川の兩岸に位置する一等星「こと座のベガ（織姫）」と「わし座のアルタイル（彦星）」に例えられ、二つの星と「はくちょう座のデネブ」を結んだのが「夏の大三角形」です。

日本では中国の「星祭り」伝説とは別に、「棚機津女（たなばたつめ）」の伝説が祖先の霊あるいは神様の「神聖な衣を織る乙女」を棚機津女と呼び、織姫と彦星の話と合わさって「七夕」が「たなばた」と読まれるようになったといわれています。

他にも日本の農村には苗代へ種を蒔くタナバタ祭りがあり、これが七夕の由来になったという説も。「タナ」は種子のことを、「バタ」は端を意味し、水田の端にある取水口から水を田へ入れる重要な農事であり、「タナバタ」は大切にされてきました。

このように、中国の伝説や日本の風習が複数合わさったものが七夕行事であるといえます。

子どもの頃、学校や家庭で七夕の飾りを作ったことはありませんか。願い事を書いた短冊を飾るのと同様に、七夕ではいくつかの定番の七夕飾りがあります。そして、それら全てには意味が込められているのです。日本の七夕の風習として、短冊に願い事を書くというものがあります。笹の木に吊るされたカラフルな短冊は、日本の七夕文化を象徴する光景です。この短冊に願い事が書かれるようになったのは江戸時代。当時は書道など技芸の上達を願うものが多かったといわれています。

また、短冊に使われる紙の色は、赤・青・黄・白・黒の五色。これは中国古代の学説「五行説」という、自然は木・火・土・金・水の五つの元素の循環に従って変化するという説に基づいたものです。赤は火、青は木、黄は土、白は金、黒は水を指します。ただし、黒に関しては負のイメージが強いこともあり、紫が代わりに使われる場合が多いです。

そして短冊の色には意味があります。赤の短冊は、親や先祖への感謝を表すという意味。青の短冊は人間力を高め、徳を積むという意味。黄の短冊は、人を信じ大切に思う気持ちを意味します。白の短冊は、義務を守る心を意味します。黒の短冊は、学業の向上を願う気持ちを表します。

私の「心に残ったあの一言」

道徳の窓
NO69

「青いバラの花言葉は？」

主任教諭 稲見 泰央

卓球部の顧問をしていた時のことです。念願の都大会団体戦出場を果たした翌日、こんな話をミーティングでしました。「今までは『いかにして勝つか』が大切だった。しかし、次の多摩大会でいよいよ引退だ。だから、これからは『いかに負けるか』だ。最後の負け方が大切なんだ。」というような話をしました。最後の1週間は「負け方が大切」を生徒に訴え続けました。そして、最後の試合の前日のミーティングも「負け方」で締めくくると、「先生、お誕生日おめでとうございます。」と、生徒から素敵な「青いバラ」の造花をプレゼントされました（この日は偶然にも自分の誕生日で、それとなく、生徒に宣伝しておいた結果です。）。

家に帰って青いバラの花言葉を調べると次のようなことがわかりました。つい最近まで青いバラの花言葉は「不可能」でした。これは世界中の園芸家がいくら努力しても青いバラを創り出すことができなかったためです。ところが最近になって日本のある企業が青いバラを創り出すことに成功し、その結果として青いバラの花言葉は「奇跡は起こる」「夢はかなう」に代わったということです。つまり、生徒たちは青いバラに「先生は負けることばかり考えているけど、私たちは決して負けませんよ。奇跡は起こるのです。最後の試合を見ていてください。」というメッセージだったわけです。

次の日、引退のかかった多摩大会は壮絶な試合となりました。自分たちより格上のチームにフルゲーム、フルセットまで持ち込み、最後は力尽きて負けてしまい「奇跡」は起きませんでした。しかし、2年半一緒にやってきた最後の最後にこのような素敵な思い出をくれたこと、これこそが私にとっては「奇跡」でした。青いバラは今でも自宅の机の上で咲いています。

三中生の活躍

(敬称略)

「東京府中ロータリークラブ主催 作文コンクール」

「ロータリークラブ賞」	2年	福岡	春乃
「銀賞」	2年	山下	千慧
「銅賞」	2年	相澤	瑠美夏
	2年	北橋	由梨
	2年	細谷	虎之介
	2年	中村	優
	2年	新井田	明里
	2年	福谷	菜々子
	2年	澤井	陽俊

